

澄心寺庫裏

正会員 宮本佳明君

約 550 年の歴史を持つ曹洞宗・澄心寺は、伊那谷の中でも歴史の古い寺の一つである。寺院とはかつては地域のシンボルであり、子供の遊び場であり、多くの人々が気楽に参拝に訪れる場所であり、地域と密接な関係を有していた。現在はその関連が希薄になりつつある。特に集落から離れ、天竜川の河岸段丘の奥まった山辺の静寂な場所にひっそりと建つ澄心寺は、荘厳さを湛えている一方、檀信徒にとっては、寺へ「登る」ことが非日常的な空間と時間への道程になっている。

若くして新しい住職となられた第 32 世ご住職は、新しい庫裏を建設するにあたり、単に宗教儀式のために存在する寺院ではなく、書道や絵画の展覧会の会場、コンサートホールほか様々な活動、集いの場として、寺院を蘇らせたいという夢を抱かれた。そしてその夢を実現するための手段として、「建築学的創造性」にその可能性を求められた。そのような趣旨に基づいて、寺院の庫裏としては異例のデザインコンペティションが実施された。プログラムのユニークさもあつてのことと思われるが、183 という多数のアイデアが寄せられ、当案が選定された。檀家に親しまれる寺院が目指されたことから、コンペの審査から設計まで、檀家も積極的に計画に参画するユニークなプロセスが取られた。

既存の伽藍は 1752 年創建の法堂と 1830 年創建の客殿からなるが、これらの増改築の歴史を遡ってみても、数百年変わらない大屋根と、数十年ごとに改修が繰り返される内部空間とで構成されることが分かる。長期間にわたって変わらない大屋根を鉄筋コンクリート造で、改修が想定される内部を木造で作ることが、本建物の骨格を成すコンセプトである。曲面の大屋根を 3 本の壁柱が支えるダイナミックな構造は、必ずしも構造的合理性を追求したものとは言えないものの、この構造形式が必要とする厚い部材断面が、合理的構造が有する細く、薄い部材断面にはない、構造体の高い耐久性に繋がっているとも言える。またこの厚さにより、寒冷地の寺院に有用な大きな熱容量が得られてもいる。一方、規格品部材を中心に簡易なディテールで作られた木造部分は、仮設建築的な設えにも見える。スケルトンインフィルが謳われた建築は巷に氾濫しているものの、本建築ほど明快に実現されたものは多くはないだろう。

大屋根の形状は宗教建築としての伝統を継承するものであるとともに、人々を招き入れる深い軒先が、壁柱で支えられた大きな RC キャンティレバーという現代的技術で表現されている。この白い大屋根は天竜川河畔の旧三州街道からも遠望され、寺院の新たな象徴となっている。旧来の木造寺院建築のデザイン様式をそのまま RC 造や鉄骨造で代替する事例は数多く見られるが、それらとは一線を画す RC 造の特性を寺院建築に生かした新しい取り組みである。

以上のように本建物は、地域環境への適合性、外部・内部空間における造形の独創性などの面で特に優れているものと考えられる。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。